

都市型農園を通じた高齢者の社会参加 実践の構築と評価指標の作成について

宅地を農園に転用し、定年後の男性が輝く居場所を創出して孤立防止から地域活動の担い手づくりへと事業を発展させています。

社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会

仲間との共同作業で味わう

野菜づくりの醍醐味

「定年後の男性の孤立」が地域の課題になっていきます。ことに人と人との繋がりが希薄な都市部において居場所づくりや地域活動をいかに推進するかは重要で、各地でもさまざまな方法論が模索されてきました。そのようななかで都市部に誕生した農園の活動を通して、シニア層の社会参加モデルを構築する取り組みを行ったのが、社会福祉法人豊中市社会福祉協議会（以下、豊中市社協）です。

地域の大半が宅地を占め、農業就業者はごくわずかという大阪府豊中市に、農業（アグリカルチャー）を共同で行う都市型農園「豊中あぐり」が

助成年度

2017年度～
2019年度

助成決定額

1年目500万円
2年目500万円
3年目470万円



誕生したのは2016年のことです。駅からわずか徒歩5分の住宅地の一角を所有者が「地域づくりに役立ててほしい」と無償提供を申し出たのです。豊中市社協に事務局が置かれ、宅地を菜園に転用し、そこを拠点に農業を通じて男性の社会参加を促進する取り組みがスタートしました。

野菜の作り方や地域福祉を学ぶ「あぐり塾」を開講すると男性20名が会員として入会しました。菜園の通り道はレンガを敷き詰めてスタイリッシュな都市型のデザインにし、認知症や車椅子の利用者も来園しやすいよう、畝幅も広く取りました。臭いのある肥料は使わず、参加者は全員ユニフォームを着用することで、周辺で暮らす住民のとまどいを払拭するように配慮しました。後に収穫した

野菜を朝市で販売すると、安くて新鮮だと地元でも好評を博すようになりました。

「でも皆さんは高度成長を支えてきた元企業戦士で、自分の暮らす地域に関心を寄せたことがない方ばかり。単独で市民農園や自宅のプランターでの野菜づくりは経験していても、グループで共に成果を上げていくという発想は皆無。共同農園だから『みんなで話し合いながら進めましょう』と言っても全然響きませんでした」と豊中市社協の勝部麗子さんは笑顔で振り返ります。

当初は、収穫量や効率性ばかりに目が行き、「畑を人数で区分けして個人で管理し、競争しよう」などの意見も出る始末でした。ところがいざ始めてみると、何でも相談できる相手はいるし、何よりみんなで汗を流して耕し、収穫を喜びあえる仲間の存在の大きさに気づいていきます。集い、関わり、共同する楽しさが実を結び、2か所目の菜園の開園が決定しました。空港会社から借り受けた荒れた土地を田んぼに変身させようと、2017



福刈りたっぶりの収穫

7年度から3年間継続の赤い羽根福祉基金の助成を申請しました。

「さまざまな事業計画を立てましたが、まず農機具を購入して田んぼを整備。水利組合



買い物に困難な高齢者のために移動販売車を活用

は水の利用を許諾し、初めは遠巻きに眺めていたJAや農業委員会も、私たち“素人”の奮闘を褒めてくれるようになりました」と勝部さんは話します。

勢いがついた「豊中あぐり」は、介護保険制度上の日常生活圏域に1か所ずつ菜園を設けようと計画しました。有料老人ホームの屋上庭園や会社の保有地等、各方面から次々に土地の無償提供の申し出が寄せられ、現在7か所の農園が広がっています。所有者も地域に役立ちつつ、無償管理者がいてくれるのは吉報でもあります。民家が建っていた土地が提供された時は、家を取り壊さずに拠点

「和居輪居わいわい」にしました。若者も集まって、福祉基金を活用しての改装も楽しい活動の一つになりました。コーヒーマシンの淹れ方講座やシニア講座、子ども食堂の開催など、他団体との共済事業も交えながら、にぎやかな多世代交流の場として地域から注目を浴びるようになります。

野菜の栽培から社会貢献へと活動の幅が広がる

子ども食堂に寄付した野菜を食べる子どもたちの笑顔は、会員たちのやる気を高めます。収穫物で作った「あぐりコロケ」は朝市で飛ぶような売れ行きです。また、収穫したサツマイモを芋焼酎にして焼酎会員に配布をし、「豊中あぐり」のサポーター獲得のための美味しいツールになっています。

福祉基金の助成2年目には、移動販売車を購入し、地理的に買い物に困難な高齢者のために野菜を直売するとともに、安否確認の役目も果たしています。助成3年目は、釧路市に援農隊として駆けつけ、生路ふきの切り出しを初体験し、元トップ営業マンの会員が露販売で凄腕を披露して売り上げに貢献し、感激される一幕もありました。現役時代に積んだキャリアが異なる分野で再び活かされるのは嬉しいことです。

「豊中あぐり」の参加者一人ひとりのエコマップを作成して、農園の活動を通じた社会関係の広がりを可視化し、参加者のアンケート調査の結果か



担当者の声

社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会
福祉推進室長 勝部 麗子さん

この事業が発展的に進められているのは、自由度の高い活動ができる赤い羽根福祉基金と出会えたおかげが大きいと思います。たとえ広い土地が借りられても、農機具をそろえるなどの基盤が整えられないと、資金調達のために野菜の売り上げを増やすことなどがメインになりがちです。助成を受けて余裕のある活動ができると、さまざまな発見や発想が生まれ、活躍の場がさらに広がってワクワクします。会員の皆さんもその自覚があるので、活動時には自主的に赤い羽根を付けています。今後はファミリー菜園を作ったり、拠点を使って多世代や外国人の方、あるいは認知症の方など社会的に孤立しやすい方々とも交流したいと考えています。

らも、①仲間が増えた、②健康になった、③社会参加の場が増えたという具体的な成果が現れ、良いことづくめです。土づくり、栽培の企画、収穫から販売、農業の六次化、そして対人支援のボランティアへ——。20名で始まった会員は150名となり、先輩の後に続く50代の「あぐりジュニア」の参加も増えていきます。人と出会い、関係性を広げながら、共に地域をつくりあげる取り組みは、新たなチャレンジを続けながら、各地に広がりを見せていくことが期待されています。